

赤字は、受験の範囲をやや逸脱した補足コメントです。
主に、日本史ではどのように教わるかを簡単にまとめました。

① 琉球王国

江戸時代より前

- ・ **琉球王国の成立 (1429 年)**
首里城に琉球王府を設置。日本・明の両国に朝貢。(日中両属)
- ・ **中継貿易の展開**
那覇を中心に、明・日本・李氏朝鮮と東南アジア諸国を結ぶ。(万国の津梁)
のち、ポルトガル・スペイン商人の進出や (南蛮貿易)、明の海禁政策緩和により衰退。

江戸時代

- ・ **薩摩藩の支配 (1609～)**
幕府の許可を得た島津家久が琉球に侵攻、首里城を落とし国王尚寧を服属させる。
与論島以北は薩摩藩領となる。※本当の1つ北の島で、今も鹿児島県
- ・ **日中両属**
王国の形式を残し、中国 (明のち清) との朝貢貿易を継続。
清には毎年進貢船を派遣、清からは冊封使が来琉した。
- ・ 琉球からの使節 (薩摩藩が同行) ⇒ 異国風の服装・髪型などを強制
 - あ **慶賀使** 将軍の代替わりごとに派遣
 - い **謝恩使** 国王の代替わりごとに派遣

沖縄県設置 (琉球処分)

- ・ 1871 年 **日清修好条規**後、**琉球漂流民殺害事件** (台湾で琉球民が殺害される)
- ・ 1872 年 琉球藩を設置 (前年に鹿児島県に編入されていた)
- ・ 1874 年 **台湾出兵** (征台の役)
琉球民殺害事件を理由に出兵。
日本が清に賠償を請求したところ、清は拒否 (台湾は清の管轄ではないと主張) したから、日本が落とし前を付けたという話。
- ・ 1879 年 **沖縄県を設置**。琉球処分を完了
日清戦争における日本の勝利によって解決。

② 秀吉による朝鮮侵略

目的

・朝鮮・明の制服 大名対策（国内領土のいきづまり） など

文禄の役（1592~1593年）

加藤清正ら 15 万人を出兵。釜山に上陸後、漢城、平壤を制圧し、豆満江に到達した。しかし、李舜臣率いる朝鮮水軍（亀甲船を使用）や、民衆が蜂起した義兵の抵抗、李如末率いる明の援軍などにより苦戦し長期化。冬の寒さも重なり死傷者が続出。厭戦気分による諸将の不和も起こったため、講和工作が進められたが、秀吉が強圧的な講和条件を提示したため決裂した。

慶長の役（1597~98年）

講和決裂により、実力で朝鮮南部を奪うため 14 万人を再出兵したが苦戦。翌年秀吉が死去。撤兵。

豊臣政権の衰退（家康は出兵せず）。朝鮮・明の疲弊と、強烈な反日感情の発生。

朱子学研究が発展。活版印刷術、陶磁器の新技法も伝来。（有田焼、伊万里焼など）

秀吉は北京の制圧をしようとしていた（一説にはスペイン・ポルトガルからの侵略を未然に防ごうとしていたらしい）ため、朝鮮は侵略したというより、ただの通り道だった。

③ 4つの口

長崎貿易

- ・ 中国
清が海禁政策を解除したため貿易額は増大。
輸出品は、銀・金・銅・海産物（俵物）
輸入品は、生糸・絹織物・書籍・西欧や南方の産物など
- ・ オランダ
出島のオランダ商館が貿易を独占。
オランダ風説書による海外情報の獲得
- ・ 海舶互市新例（1715年）

中国	年間 30 隻・銀 6000 貫目
オランダ	年間 2 隻・銀 3000 貫目

朝鮮との貿易

- ・ 1609年 朝鮮政府と宗氏（対馬藩）が己酉条約を結び貿易を再開。宗氏が貿易を独占。
- ・ 朝鮮通信使
新将軍就任の慶賀が名目。対馬藩が同行し、幕府は丁重に應對。

琉球王国との関係（再掲）

- ・ 薩摩藩の支配（1609～）
幕府の許可を得た島津家久が琉球に侵攻、首里城を落とし国王尚寧を服属させる。
与論島以北は薩摩藩領となる。※本当の1つ北の島で、今も鹿児島
- ・ 日中両属
王国の形式を残し、中国（明のち清）との朝貢貿易を継続。
清には毎年進貢船を派遣、清からは冊封使が来琉した。
- ・ 琉球からの使節（薩摩藩が同行）⇒異国風の服装・髪型などを強制
 - あ 慶賀使 将軍の代替わりごとに派遣
 - い 謝恩使 国王の代替わりごとに派遣

最近は、「江戸時代は鎖国していた」とは、強調されない。別に「鎖国していた」としても問題はない。

蝦夷地との関係

- 松前藩の支配（1604～）
1604年 松前氏が家康からアイヌとの交易独占権を保障される。

④ 朝鮮との関係（維新後）

- 1873年 征韓論（武力による朝鮮の開国をめざす）
留守政府の西郷隆盛、板垣退助、江藤新平らが下野（＝明治6年の政変）
- 1875年 江華島事件
日本の軍艦雲揚号が挑戦を挑発、砲撃される。
- 1876年 日朝修好条規
日本優位の不平等条約。清の宗主権を否定。
清の顔を立てるための不平等（日清修好条規は清と対等）
- 1904年 2月 日韓議定書
8月 第一次日韓協約
- 1905年 11月 第二次日韓協約
（韓国の外国権を剥奪。保護国化。漢城に統監府を設置。伊藤博文が初代統監）
- 1907年 ハーグ密使事件
オランダのハーグで開催中の第2回万国平和会議に、韓国皇帝の高宗が密使を送り独立回復を提訴するが、列国に黙殺される。
第三次日韓協約（高宗を退位させ内政権を掌握。秘密協定により軍隊も解散。
反日の義兵運動が高揚、全国化。
- 1909年 伊藤博文暗殺事件
満洲のハルビン駅で韓国人の民族運動家安重根に暗殺される。
- 1910年 日韓併合条約
韓国を植民地化、日本領朝鮮と改称（首都漢城も京城と改称）
京城に朝鮮総督府を設置。

⑤ 日本の冊封関係について

日本が冊封体制を脱したのがいつなのか、細かく言うのは難しい。

早ければ607年の聖徳太子の小野妹子派遣（遣隋使）で、遅くとも701年の大宝律令制定（つまり、律令国家が成立）と言える。

以後、日本は原則として冊封体制の外に存在。

例外は、足利義満の時期（1402年に冊封され、1411年に息子の義持が中絶。）の9年間。

⑥ 日清戦争までの流れについて

1884年 甲申事変

清仏戦争における清の敗北を契機に、日本公使館の支援を受けた独立党が、クーデターを決行。しかし、清に鎮圧され、日本公使館も焼き払われ、独立党の金玉均らは日本に亡命。日朝間で漢城条約締結。朝鮮側が謝罪し、日本は賠償金を獲得。

1885年 天津条約

甲申事変後の日清両国の武力衝突を避けるために締結。

- ・日清両国の朝鮮からの撤兵
- ・日清両国の朝鮮への軍事顧問の派遣停止
- ・日清両国の朝鮮への出兵時における事前の相互申告義務。

1894年 甲午農民戦争（東学党の乱）

朝鮮の閔妃政権が乱の鎮圧に失敗し、清に救援を要請。清は事前申告をせずに出兵し、日本は天津条約の規定に従い出兵。

日清戦争に発展。